

規範逸脱行動に対する行動基準と態度

出口拓彦

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育臨床心理学))

Principles and attitudes toward rule-breaking behavior

規範逸脱行動に対する行動基準と態度

出口拓彦

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育臨床心理学))

Principles and attitudes toward rule-breaking behavior

Takuhiko DEGUCHI

(Department of Psychology, Nara University of Education)

要項: 本研究では、規範逸脱行動に関する行動基準・態度と逸脱頻度・規範意識の関連について検討した。大学生334名を対象に質問紙調査を行った。私語、メール、居眠り、秘密漏洩、ポイ捨ての5つの逸脱行為に対する態度について、「自分も周囲も遵守」「自分は遵守、周囲は逸脱」「自分は逸脱、周囲は遵守」「自分も周囲も逸脱」という4つの状況に対する態度について回答を求めた。これらの態度を基に、調査対象者を「遵守」「逸脱」「同調」「反対」および「中立」の5つの行動基準 (e.g., Deguchi, 2013, in press) に分類した。そして、行動基準を独立変数、逸脱頻度ないし規範意識を従属変数とした分散分析を行った。その結果、「逸脱」の行動基準を持つ者は、全般的に「遵守」の行動基準を持つ者よりも逸脱頻度が高く、規範意識が低い傾向が示された。このことから、行動基準の分類方法には、一定の妥当性があることが示唆された。

キーワード: 規範逸脱行動 rule-breaking behavior
行動基準 principles
態度 attitudes

1. はじめに

規範逸脱行動に関する研究は、これまでに数多くなされている (e.g., Cialdini, Reno, & Kallgren, 1990; 北折・吉田, 2000; Osman, 1982; Reno, Cialdini, & Kallgren, 1993)。また、教育場面における規範逸脱行動を扱った研究も少なくない (e.g., Durmuscelebi, 2010; 北折, 2006; 北折・太田, 2011; 水野, 1998, 2001; 島田, 2002; 杉村・小川, 2003)。

小牧・岩淵 (1997) は、私語をしてはいけないものであるとみなしている学生は少なくないものの、多くの学生が私語をしているという状況を報告している。また、卜部・佐々木 (1999) は、授業中の私語に対して、生徒は「否定的な私的見解」を持っているものの、学級の規範に応じて「偽悪的」にふるまっている (私語をしている) 可能性について考察している。

社会規範は、「多くの人々が適切・不適切と知覚することに基づく」(北折・吉田, 2000; p.30) 規範である「命令的規範」と、「多くの人々が実際の行動としてとるであろうとの知覚に基づく、行為的な」(北折・吉田, 2000; p.30) 規範である「記述的規範」に分類される (Cialdini et al., 1990)。この記述的規範は、駐輪違反という逸脱

行動の一因となっている可能性 (北折・吉田, 2000) が示めされている。これらの研究は、規範逸脱行動について検討する際には、個人々が逸脱行動に対してどのように考えているか (「規範意識」等) だけでなく、周囲に存在する人々の行動についても併せて着目することの重要性を示唆している。

このような周囲の人々の行動が規範逸脱行動に及ぼす影響について検討するため、Deguchi (in press) は、決定行列 (decision matrix) を援用したコンピュータ・シミュレーションを行っている。ここで使用されている決定行列とは、基本的にはゲーム理論 (e.g., Rapoport & Guyer, 1966; Scodel, Minas, Ratoosh, & Lipetz, 1959) や相互依存性理論 (e.g., Kelly, Holmes, Kerr, Reis, Rusbult, & Van Lange, 2003; Thibaut & Kelley, 1959) における利得行列ないし成果行列と同様である (ただし、決定行列に記載されている利得は自分のもののみであり、相手の利得は扱われていない)。具体的には、「自分」と「周囲」(の人々) は、(規範を)「遵守」(する)・「逸脱」(する)、という2つの選択肢を有している。そして、この2つの選択肢の組み合わせによって2x2の計4つの状況が存在する。すなわち、①「自分も周囲も遵守」、②「自分は遵守、周囲は逸脱」、③「自分は逸脱、周囲

は「遵守」、④「自分も周囲も逸脱」、という4状況である。ゲーム理論における「囚人のジレンマ」(e.g., Axelrod, 1980a, 1980b) の利得行列でいえば、それぞれ、①R, ②S, ③T, ④P, に該当する。囚人のジレンマとは、例えば、自分と相手のR, S, T, P の値を 3, 1, 4, 2とした場合である(石原・金井, 2002)。逸脱行動に関する例を挙げると、「自分も相手も遵守すれば2人とも比較的満足する(互いに3点を得る)のだが、もしも自分が遵守しているときに相手が逸脱すると、逸脱した相手の方が最も満足し(4点)、自分は最も不満足となる(1点)。このため、自分も相手も逸脱を選択してしまい、比較的低い満足度しか得られなくなる(共に2点)」といった状況である(R, S, T, Pは、それぞれ、Reward, Sucker, Temptation, Punishmentの頭文字である。詳しくはAxelrod (1984) や齋藤 (1999) などを参照されたい)。

そして、Deguchi (in press) は「RとT」、「SとP」における利得の大小関係を基にして、決定行列を4つの行動基準に分類している。すなわち、遵守(「R>TかつS>P」); 以下、「R>T ∧ S>P」と記す)、逸脱(「R<T ∧ S<P」)、同調(「R>T ∧ S<P」)、反対(「R<T ∧ S>P」)である。例えば、R:S:T:P = 2:1:1:2であれば「同調」となる。そして、集団における4つの行動基準の比を様々に変化させ、規範逸脱行動が集団内に広がる条件について、セル・オートマトン法(e.g., Latane, Nowak, & Liu, 1994; Nowak, Szamrej, & Latane, 1990)を用いたシミュレーションによって検討している。

しかし、Deguchi (in press) の研究は、実験的に作成されたデータを入力したシミュレーションによるものであり、質問紙調査や観察等の手法によって、「実際の」逸脱行動に対する態度や逸脱頻度を測定したデータを用いた検討は行われていない。したがって、この行動基準の妥当性については、十分な検討は行われていないと考えられる。

そこで、本研究においては、質問紙調査によって様々な規範逸脱行動に対する態度を測定し、これを基にして構成された決定行列を行動基準へと分類した。さらに、逸脱頻度も測定し、行動基準と逸脱頻度の関係について分析した。また、規範意識を、先行研究(e.g., 出口・吉田, 2005)と同様の方法(ある行動を「まずい」と思うか、それとも「良い」と思うか、について回答を求める)で測定し、行動基準との関係について分析した。そして、逸脱行動に対する態度(R, S, T, Pという4つの状況に対する態度)を基にした行動基準の分類方法の妥当性について考察した。

行動基準の分類方法が妥当なものであれば、「逸脱」という行動基準を持った者は、「遵守」という行動基準を持った者よりも高い逸脱頻度を示し、「同調」と「反対」は両者の中間に位置すると考えられる(「同調」は「周囲の状況に合わせて行動する」、「反対」は「周囲の状況と反対の行動をとる」という行動基準であるため、基本的

に規則を守る「遵守」よりは逸脱頻度が多く、規則を破る傾向にある「逸脱」よりは逸脱頻度は低いと予測される。「同調」と「反対」のいずれの逸脱頻度が高いかについては、「遵守」と「逸脱」の大小関係に依存すると考えられる)。また、規範意識については、「逸脱」という行動基準を持った者は、「遵守」という行動基準を持った者よりも低い逸脱頻度を示し、「同調」と「反対」は両者の中間に位置すると推測される。

2. 方法

2.1 調査対象者および手続き

2つの四年制大学の学生334名(男子93名、女子238名、不明3)。調査対象者は、履修者50名以上の比較的多数で行われる講義の受講者であった。質問紙は匿名式で行い、授業ごとに集団で配布した(2007年度後期に実施)。質問紙の最初には、質問内容についての概要の他に、回答の内容は授業の成績には一切影響しないこと等についても記載した。

2.2 測定された変数

2.2.1 規範逸脱行動に対する態度

「授業中に私語をする」(私語)、「授業中に携帯メールを使用する」(メール)、「授業中に居眠りをする」(居眠り)、「信用して話してもらった秘密を、他の人にしゃべる」(秘密漏洩)、「空き缶やペットボトルなどをポイ捨てる」(ポイ捨て)、という5つの項目を設定した(吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・齋藤・森・石田・北折(1999)や小牧・岩淵(1997)を基にした)。「私語」に関しては、卜部・佐々木(1999)や出口・吉田(2005)を基に、「ここでの『私語』とは、『授業中に、学生同士で行う私的な発言』のことをいいます。このため、授業に関する私語(『授業内容に対する疑問点を話す』など)と、授業と無関係の私語(『笑い話をする』など)の双方を含みます。(ただし、先生が許可した場合の発言は除きます。)」と文章で説明した(なお、「いま受けている科目の授業での私語」について回答するよう求めた)。

これらの逸脱行動を「他者や周囲に及ぼす影響」という観点から見ると、「私語」「秘密漏洩」は、自分だけでなく、他者にも大きな影響を与えうる行動と考えられる。「ポイ捨て」は、特定の他者のみならず、行為者が知らない人々に対しても、否定的な影響を及ぼしかねない行動である。また、逸脱行為の結果が、(誰かがゴミを直ちに片付けない限り、)比較的永く続くという特徴がある。「居眠り」「メール」は、他者に対する直接的な影響(「学生の話し声で、教員の説明が聞こえなくなる」など)は、比較的少ないと思われる行動である。

また、「逸脱行動を行う場所」という観点では、「私語」「メール」「居眠り」は、授業が行われる場所が、基本的に教室に限定される(厳密には、「授業中」に限定し

て質問項目が作成された)。これに対して、「秘密漏洩」「ポイ捨て」は、教室以外の場所(食堂や屋外など)においても行うことが可能な行動である。

これらの5つの逸脱行為に対する態度について、「自分も周囲も遵守」(R)、「自分は遵守、周囲は逸脱」(S)、「自分は逸脱、周囲は遵守」(T)、「自分も周囲も逸脱」(P)、という4つの仮想の状況において、自分がどのように思うのかについて回答を求めた(e.g., 出口, 2007; 黒川, 1990)。具体的には、「もしも、以下のような状況になったとしたら、あなたは満足ですか? それとも不満ですか?」と文章で示し、逸脱行動ごとに、“1)「自分も、周囲の人たちも、している」状況”(P)、“2)「自分はしているが、周囲の人たちはしていない」状況”(T)、“3)「自分はしていないが、周囲の人たちはしている」状況”(S)、“4)「自分も、周囲の人たちも、していない」状況”(R)、という4つの項目を呈示した(括弧内のアルファベットは、質問紙には記載していない)。なお、「周囲の人たち」については、「各行為が行われる可能性がある場所にあなたがいる時、自分の周りにいる人たち(友人以外の人も含みます)」と文章で説明した。回答は、「7.とても満足」～「1.非常に不満」の7段階で評定を求めた。また、「6」～「2」の各段階については、「とても満足」「非常に不満」のような程度を示す表現はつけず、「7」と「1」のみに記載した。

2.2.2 規範逸脱行動の頻度

上記の5つの行動に対して、「5. たくさんした」「4. かなりした」「3. ととききした」「2. あまりしなかった」「1. ぜんぜんしなかった」の5段階評定で回答を求めた。さらに、私語尺度(出口・吉田, 2005)についても回答を求めた。この尺度は、「授業と無関係の私語」(私語1)、「授業に関する私語」(私語2)の2つの下位尺度によって構成されている(各4項目)。

2.2.3 規範逸脱行動に対する規範意識

「規範逸脱行動の頻度」と同様の項目について、「5. 良いと思う」「4. まあ良いと思う」「3. どちらともいえない」「2. 少しまずいと思う」「1. まずいと思う」の5段階評定で回答を求めた。さらに、前述の私語尺度と同じ項目についても、同様の方法(5段階評定)で回答を求めた。

2.2.4 その他

上記以外に、測定を実施した授業への出席率、授業で近くの席に座っている友人の数、年齢等について回答を求めた。

3. 結果

3.1. 分析の対象としたデータ

まず、質問紙上の各項目に対して、ほとんど未回答で

あったものについては、以後の分析から除外した。また、年齢が他の調査対象者に比べて高かったものについても、他の回答者と発達段階に大きな差があると考えられたため、分析から除外した。

以上のことから、計332名(男子93名、女子236名、不明3)分のデータについて分析した。さらに、「授業で『近くの席』に座っている友人の数」に対する回答が100を超えたものについては、その妥当性に問題があると思われることから、当該項目についてのみ、分析から除外した。

分析の対象としたデータにおける回答者の平均年齢は19.15歳(標準偏差0.84)であった。また、授業への平均出席率は9.30割(標準偏差0.94)であった。

3.2. 指標の算出

3.2.1 行動基準の分類

まず、R, S, T, Pの4つの状況間における態度の差について検討するため、状況を独立変数、逸脱行動に対する態度を従属変数とした1要因4水準の対応のある分散分析を行った(Table 1)。その結果、全ての逸脱行動において、状況の有意な主効果が示された($p < .05$)。Bonferroni法による多重比較の結果、すべての逸脱行動において、Rに対する態度は、他の状況に対する態度よりも肯定的である傾向($p < .05$)が示された。また、SとTについては、「居眠り」を除く全ての逸脱行動において有意な差($S < T$)が示された($p < .05$)。

次に、逸脱行動に対する4つの(状況における)態度(R, S, T, P)を基にして決定行列を作成し、調査対象者を5つの行動基準(e.g., 出口, 2012)のいずれかに分類した。質問紙調査によるデータを用いて行動基準への分類を行う場合は、「RとT」ないし「SとP」の利得が等しいケース(例: R:S:T:P = 3:5:3:1など)の分類方法についても考慮する必要がある(e.g., Deguchi, 2013)。このため、本研究においては、Deguchi (in press) による分類方法を拡張したもの(e.g., 出口, 2012)を使用した。

これは、「遵守」と「逸脱」の行動基準の定義を並び、さらに、「中立」という第5の行動基準を加えたものである。具体的には、①遵守(「R>T \wedge S>P」 「R=T \wedge S>P」 「R>T \wedge S=P)」、②逸脱(「R<T \wedge S<P」 「R=T

Table 1 逸脱行動に対する状況と態度(満足度)の分散分析結果

状況		各逸脱行動に対する態度				
		私語	メール	居眠り	秘密漏洩	ポイ捨て
R	平均値	5.63	5.27	5.22	5.69	5.79
	標準偏差	1.42	1.38	1.38	1.94	1.98
S	平均値	2.55	3.64	4.03	1.88	1.76
	標準偏差	1.29	1.30	1.31	1.34	1.24
T	平均値	3.33	3.84	3.86	2.30	2.09
	標準偏差	1.26	1.21	1.26	1.47	1.39
P	平均値	3.90	4.09	4.37	2.14	1.99
	標準偏差	1.30	1.24	1.30	1.36	1.32
	<i>n</i>	325	329	329	330	329
	<i>F</i>	323.89	129.89	91.15	531.64	654.35
検定結果		$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$
	偏 η 自乗	0.50	0.28	0.22	0.62	0.67

① $S < P$ 」「 $R < T \wedge S = P$ 」)、③同調 ($R > T \wedge S < P$)、④反対 ($R < T \wedge S > P$)、⑤中立 ($R = T \wedge S = P$) という、5つの行動基準に分類するものである。

この方法を用いて、逸脱行動(「私語」「メール」「居眠り」「秘密漏洩」「ポイ捨て」)ごとに、調査対象者をいずれかの行動基準に分類した。その結果、「私語」という逸脱行動においては、「同調」という行動基準を持つ者が最も多いことが示された(Table 2, Table 3における各群のn参照)。「メール」「居眠り」では、「中立」の行動基準を持つ者が最も多かった。「秘密漏洩」「ポイ捨て」については、「遵守」の度数が最高であった。なお、「反対」という行動基準については、いずれの逸脱行動においても該当者がほとんど存在しなかった(0.0%~0.3%)。このため、「反対」については、以後の分析からは除外し、「遵守」「逸脱」「同調」「中立」の4つの行動基準について分析した。

3.2.2 逸脱頻度

私語尺度による測定データについては、下位尺度ごとに、 α 係数を算出した。その結果、「授業と無関係の私語」(私語1)は.94、「授業に関する私語」(私語2)は.86と、高い信頼性が示された。このため、各項目に対する回答を合計し、項目数で除したものを指標とした。それ以外の項目については、各項目に対する回答を、そのまま指標とした。なお、以後、私語に関する指標については、私語尺度による指標のうち、「授業と無関係の私語」は「私語1」、「授業に関する私語」は「私語2」と記し、単一の項目による指標については「私語」と記載した(後述の「規範意識」についても同様)。

3.2.3 規範意識

上述の「逸脱頻度」と同様の方法で、各指標を算出した。私語尺度の α 係数については、私語1は.91、私語2は.87であり、高い信頼性が示された。

なお、このままでは、数値が高いほど、規範意識が低い(逸脱行動に対して寛容である)ということの意味する指標となる。したがって、混乱を防ぐために、6から各指標の値を減ずることによって、数値が高いほど、規範意識が高い(逸脱行動に対して不寛容である)ことを示すものへと変換した。

3.3. 行動基準と各変数間の関連

3.3.1 行動基準と逸脱頻度

行動基準(「遵守」「逸脱」「同調」「中立」)を独立変数、逸脱頻度を従属変数とした、1要因4水準の対応のない分散分析を行った(Table 2)。その結果、全ての逸脱行動において、行動基準の有意な主効果が示された($p_s < .05$)。具体的には、「居眠り」を除いて、「遵守<同調<逸脱<中立」の順で、逸脱頻度が高い傾向が示された。「居眠り」については、「同調<遵守<中立<逸脱」とい

Table 2 行動基準と逸脱頻度の分散分析結果

行動基準		逸脱頻度						
		私語1	私語2	私語	メール	居眠り	秘密漏洩	ポイ捨て
遵守	平均値	2.08	2.43	2.53	2.43	3.13	1.32	1.17
	標準偏差	0.85	0.81	1.03	1.12	0.97	0.63	0.47
	n	58	58	58	87	101	186	190
逸脱	平均値	2.78	2.55	3.37	3.22	3.48	1.60	1.50
	標準偏差	1.03	0.95	1.00	0.93	0.51	1.07	0.55
	n	31	31	30	27	29	10	6
同調	平均値	2.50	2.47	3.13	2.60	3.03	1.46	1.39
	標準偏差	1.00	0.90	0.90	1.07	1.12	0.61	0.61
	n	185	184	184	80	68	68	62
中立	平均値	3.06	3.00	3.52	3.30	3.46	1.61	1.70
	標準偏差	1.16	1.09	0.97	1.08	0.90	0.92	1.00
	n	50	50	50	132	128	61	67
F		9.09	4.63	11.05	14.60	4.47	2.89	11.61
検定結果		$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$
偏 η 自乗		0.08	0.04	0.09	0.12	0.04	0.03	0.10

う順であった。Bonferroni法による多重比較の結果、「私語1」「私語」「メール」において、「逸脱」と「遵守」の間に有意な差が示された($p_s < .05$)。

3.3.2 行動基準と規範意識の関連

行動基準を独立変数、規範意識を従属変数とした、1要因4水準の対応のない分散分析を行った(Table 3)。その結果、全ての逸脱行動において、行動基準の有意な主効果が示された($p_s < .05$)。「居眠り」を除いて、「遵守>同調>逸脱」の順で、規範意識が高い傾向が示された。「居眠り」については、「同調>遵守>逸脱」という順であった。「中立」については、概して規範意識が低く、4つの行動基準の中で最低か、あるいは、「逸脱」の次に低かった。

全般的に「逸脱」の行動基準を持つ者は、「遵守」の行動基準を持つ者よりも、逸脱頻度が高い傾向が示された。Bonferroni法による多重比較の結果、「私語1」「私語」「メール」において、「逸脱」と「遵守」の間に有意な差が示された($p_s < .05$)。

Table 3 行動基準と規範意識の分散分析結果

行動基準		規範意識						
		私語1	私語2	私語	メール	居眠り	秘密漏洩	ポイ捨て
遵守	平均値	4.50	2.32	4.40	4.17	3.46	4.78	4.84
	標準偏差	0.62	0.81	0.67	0.82	0.89	0.56	0.48
	n	57	58	58	87	101	186	190
逸脱	平均値	3.69	1.97	3.37	3.26	3.13	4.40	4.33
	標準偏差	0.87	0.69	1.13	1.26	1.07	1.07	0.52
	n	30	30	30	27	30	10	6
同調	平均値	4.21	1.99	4.12	3.90	3.60	4.74	4.69
	標準偏差	0.76	0.71	0.92	0.94	1.03	0.61	0.50
	n	184	182	184	80	67	69	62
中立	平均値	3.48	1.87	3.40	3.27	2.98	4.45	4.45
	標準偏差	0.78	0.80	0.86	0.99	1.05	0.92	0.88
	n	49	49	50	132	128	62	67
F		20.58	4.08	17.54	18.64	7.20	4.60	8.19
検定結果		$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$
偏 η 自乗		0.16	0.04	0.14	0.15	0.06	0.04	0.07

3.3.3 行動基準と出席率および友人の数

行動基準と学業的な適応および対人関係との関連について検討した。まず、行動基準を独立変数、出席率を従属変数とした、1要因4水準の対応のない分散分析を行った(Table 4)。

その結果、「私語」「メール」「居眠り」において、行動基準の有意な主効果が示された($p_s < .05$)。Bonferroni法による多重比較の結果、「私語」「メール」「居眠り」において、「逸脱」という行動基準を持った者の出席率は、「遵守」という行動基準を持った者よりも低

Table 4 行動基準と出席率の分散分析結果

行動基準	出席率 (逸脱行動別)				
	私語	メール	居眠り	秘密漏洩	ポイ捨て
遵守	9.57	9.66	9.52	9.35	9.37
標準偏差	0.80	0.71	0.76	0.92	0.92
n	58	86	100	185	189
逸脱	8.90	9.04	8.87	9.40	9.00
標準偏差	1.18	1.29	1.25	0.84	0.89
n	30	27	30	10	6
同調	9.34	9.33	9.40	9.30	9.23
標準偏差	0.86	0.88	0.88	1.00	1.00
n	183	80	68	69	62
中立	9.02	9.11	9.17	9.11	9.27
標準偏差	1.15	0.97	0.98	0.95	0.85
n	49	131	127	61	67
F	5.08	7.15	5.12	1.01	0.72
検定結果	$p < .05$	$p < .05$	$p < .05$	n.s.	n.s.
偏η ² 自乗	0.05	0.06	0.05	0.01	0.01

Table 5 行動基準と友人の数の分散分析結果

行動基準	友人の数 (逸脱行動別)				
	私語	メール	居眠り	秘密漏洩	ポイ捨て
遵守	3.92	3.65	3.23	3.29	3.38
標準偏差	2.60	2.24	2.28	2.39	2.46
n	57	85	98	184	188
逸脱	3.10	3.30	3.17	5.00	3.33
標準偏差	2.23	2.22	2.23	2.36	2.25
n	30	27	30	10	6
同調	3.13	2.91	3.18	3.13	3.07
標準偏差	2.33	1.98	2.22	2.33	2.38
n	181	78	67	67	61
中立	4.39	3.71	3.83	4.16	4.03
標準偏差	2.85	2.92	2.79	2.83	2.57
n	49	131	127	61	66
F	4.32	1.91	1.62	3.63	1.77
検定結果	$p < .05$	n.s.	n.s.	$p < .05$	n.s.
偏η ² 自乗	0.04	0.02	0.02	0.03	0.02

いことが示された ($ps < .05$)。

次に、行動基準を独立変数、友人の数を従属変数とした、1要因4水準の対応のない分散分析を行った (Table 5)。その結果、「私語」「秘密漏洩」において、行動基準の有意な主効果が示された ($ps < .05$)。「私語」については、「遵守」「中立」の2つが、比較的高い値を示した。「秘密漏洩」については、「逸脱」が最も高い値を示した。

3.4 逸脱行動に対する態度と各変数間の関連

3.4.1 逸脱行動に対する態度と逸脱頻度

行動基準の分類の際に用いた「逸脱行動に対する態度」の4つそれぞれの値 (R, S, T, P) と、逸脱頻度との積率相関係数を算出した (Table 6)。その結果、全般的に有意な相関 ($ps < .05$) が示され、Rについては全般的に負の相関、S, T, Pについては正の相関が示された。

ただし、Rについては、比較的弱い相関しか見られず、「居眠り」「秘密漏洩」については、有意な相関は示されなかった。また、逸脱行動ごとに見ると、「私語2」については、絶対値.20以上の相関は示されず、他の逸脱行動に比べて低いものであった。

3.4.2 逸脱行動に対する態度と規範意識

「逸脱行動に対する態度」の4つそれぞれの値と、規範意識との積率相関係数を算出した (Table 7)。その結

Table 6 規範逸脱行動に対する態度 (満足度) と逸脱頻度の相関分析結果

態度	逸脱頻度						
	私語1	私語2	私語	メール	居眠り	秘密漏洩	ポイ捨て
R	-.27	-.14	-.21	-.20	.00	-.09	-.19
S	.30	.15	.25	.34	.33	.32	.42
T	.21	.13	.34	.40	.26	.30	.32
P	.24	-.06	.36	.36	.32	.34	.42

下線は $p < .05$ であることを示す。

Table 7 規範逸脱行動に対する態度 (満足度) と規範意識の相関分析結果

態度	規範意識						
	私語1	私語2	私語	メール	居眠り	秘密漏洩	ポイ捨て
R	.39	.16	.33	.17	.08	.12	.12
S	-.46	-.18	-.42	-.50	-.33	-.45	-.51
T	-.40	-.18	-.36	-.48	-.30	-.37	-.42
P	-.38	-.22	-.35	-.45	-.28	-.40	-.48

下線は $p < .05$ であることを示す。

果、全般的に有意な相関 ($ps < .05$) が示され、Rについては正の相関、S, T, Pについては負の相関が示された。

ただし、Rについては、逸脱頻度との相関と同様、比較的弱い相関しか見られず、「居眠り」については、有意な相関は示されなかった。また、逸脱行動ごとに見ると、「私語2」については、絶対値.22を超える相関は示されず、これも逸脱頻度との相関と同様、他の逸脱行動に比べて低いものであった。

4. 考察

4.1 行動基準の妥当性

行動基準によって逸脱頻度が異なり、「遵守」よりも「逸脱」の行動基準を持つ者の方が、逸脱頻度が高い傾向が示された。また、「居眠り」以外の逸脱行動については、「同調」の行動基準を持つ者の逸脱頻度は、「遵守」と「逸脱」の中間となる傾向も見られた。一方、規範意識についても行動基準の有意な主効果が見られ、行動頻度と同様に、「遵守」の方が「逸脱」よりも高い規範意識を有していることが示された。また、「居眠り」以外の逸脱行動については、「同調」の行動基準を持つ者の規範意識は、「遵守」と「逸脱」の中間となる傾向も見られた。これらのことから、行動基準の分類方法は一定の妥当性を有していると考えられる（「居眠り」が他の逸脱行動と異なった傾向を示したことについては、「居眠り」は、一度「逸脱」すると（睡眠状態に入ると）、周囲の状況を知覚することが困難となる（特に「同調」することが難しくなる）ことが、その一因と考えられる）。

なお、「私語」「メール」「居眠り」については、「逸脱」の行動基準を持つ者は、「遵守」よりも授業への出席率が低い傾向が示された。したがって、これらの逸脱行動は学業への適応とも関連している可能性が考えられる。「秘密漏洩」と「ポイ捨て」については、教室以外の場所でも生じうる逸脱行動であったことが、授業への出席率との関連が示されなかった一因と推測される。

また、「中立」、すなわち「規範を破っても守っても、自分が感じる満足度は変わらない」という行動基準は、全般的に逸脱頻度が高い傾向も示された。「中立」の行動基準を持つ者の逸脱頻度が高い理由については、今

後、さらに検討していく必要がある。

行動基準の分類に用いた「逸脱行動に対する態度」については、逸脱頻度とRとは負の相関、S、T、Pとは正の相関が見られた。また、規範意識とRとは正の相関、S、T、Pとは負の相関が示された。R（「自分も周囲も遵守」）とS（自分は遵守、周囲は逸脱）は自分が「遵守」している状況に対する態度であり、T（「自分は逸脱、周囲は遵守」とP（「自分も周囲も逸脱」）は、自分が「逸脱」している状況に対するものである。Sの状況に対する態度と逸脱頻度との間に正の相関、規範意識との間に負の相関が見られたことは、「相手が『逸脱』している状況」に対して寛容（肯定的な態度）であるほど、自分自身の逸脱頻度は高く、規範意識は低いことを示す。また、Tの状況に対する態度と逸脱頻度との間に正の相関、規範意識との間に負の相関が見られたことは、「自分が『逸脱』している状況」に対して寛容であるほど、自分自身の逸脱頻度は高く、規範意識は低いことを示す。（「逸脱」に対して寛容であるほど逸脱行動の頻度が高く、規範意識が低い」ということを前提とすれば、）本研究の結果から、「自分が規範を『遵守』している状況であるか否か」ということよりも、むしろ、「自分・相手のいずれかにかかわらず、『逸脱』者が存在している状況であるか否か」が、逸脱頻度ないし規範意識との関連の方向性（相関の正負）を規定している可能性が考えられる。

この他に、「回答の際、調査対象者がSとTという状況を弁別していなかった」という解釈もありうる。このため、態度同士の積率相関係数を算出した（Table 8）。その結果、SとTの相関が、他の態度同士のペアよりも顕著に高いという傾向は示されなかった。また、既述の通り、多重比較の結果SとTの回答の間に、「居眠り」を除く全ての逸脱行動において有意な差（S<T）が示されたことから、SとTを弁別していなかった可能性は低いと考えられる。なお、Rとそれ以外の態度との相関（R-S, R-T, R-P; $r = .00 \sim .41$ ）は、Rを含まない態度間（S-T, S-P, T-P; $r = .31 \sim .74$ ）の相関よりも、全般的に低い傾向も示された。したがって、最初に述べたように、「自分・相手のいずれかにかかわらず、『逸脱』者が存在している状況であるか否か」が重要な視点となっていたと推測される。

なお、本研究における調査対象者は大学生のみであった。他の発達段階にある者に対しても、このような行動基準の分類法を適用することが可能であるか否かについて検討するため、今後は、大学生のみならず、児童や生徒を対象とした測定（出口, 2013）も行っていく必要がある。また、「ポイ捨て」という逸脱行動については、「逸脱」の度数は僅か6であり、このような行動基準を持つ者はかなり少なかった点についても留意する必要がある。これに関連して、本研究では、「反対」の行動基準を持つ者は、全ての逸脱行動を通して、ほとんど見られなかった（0.0% ~ 0.3%）。逸脱行動において周囲と

Table 8 規範逸脱行動に対する態度（満足度）間の相関分析結果

態度のペア	逸脱行動				
	私語	メール	居眠り	秘密漏洩	ポイ捨て
R-S	-.41	-.20	.10	-.22	-.24
R-T	-.24	-.16	.00	-.07	-.09
R-P	-.27	-.18	.06	-.14	-.14
S-T	.35	.54	.41	.62	.51
S-P	.31	.54	.39	.72	.62
T-P	.45	.66	.47	.75	.65

下線は $p < .05$ であることを示す。

異なる行動をすることは、自らの逸脱行動が目立つものとなり、非難や叱責などを受ける可能性が高くなりうる。Deguchi (in press) は、行動基準を用いたシミュレーション・モデルは、規範逸脱行動の他にも、ファッションや世論の形成 (Nowak et al., 1990) 等に適用できる可能性について言及している。このような社会現象については、いわゆる独自性欲求も関連している可能性 (e.g., 近藤・宇野・中川, 2006) が報告されている。このため、「反対」の行動基準を持った者も、比較的多く存在すると考えられる。今後は、規範逸脱行動以外の問題を対象とした検討も併せて行っていくことが重要となろう。

4. 2. 教育実践への応用

各行動基準の度数を算出したところ、「私語」では、「同調」という行動基準を持った者の割合が最も多いことが示された。生徒や学生は、私語に対して比較的否定的に認識しており（卜部・佐々木, 1999）、高い規範意識を有していること（小牧・岩淵, 1997）が先行研究で報告されている。これらの先行研究と本研究の結果を総合すると、学生は、私語を否定的に認識している（高い規範意識を持っている）が、周囲の他者が私語をすると、自分を私語をした方が満足と考えている者が多い、ということになる。すなわち、「私語」は、「記述的規範」的な影響を受けやすい逸脱行動であると考えられる。今後、私語の問題について考察する際は、私語に対する規範意識を高めるだけでなく、自分の周囲にいる学生が私語をした際、これに直ちに流されてしまうことがないように指導していくことも重要であると考えられる。

しかし、先行研究においては、私語の頻度と対人的な適応の間には正の相関があることも示されている（出口・吉田, 2005）。したがって、「周囲の学生が私語をしても、自分だけは私語をしない」という行為は、対人的な適応という観点からは、必ずしも肯定的な結果を生じさせない可能性があると考えられる。このため、私語をしないことで、対人的な適応が低下することを防止するような指導も合わせて行うことも重要となろう。また、「私語2」（授業に関する私語）については、いずれの行動基準を持つ者も規範意識の指標は3未満の平均値を示しており（Table 3参照）、調査対象者には、この行動が逸脱行動であるとは必ずしも考えられていなかった可能性がある。したがって、私語の種類によっては、規範意識を高める働きかけも重要となる可能性も示唆され

ている。

なお、「メール」「居眠り」という逸脱行動においては、「中立」の行動基準を持つ者が最も多かった。これは、「規範を破っても守っても、自分が感じる満足度は変わらない」という学生が多いことを意味する。したがって、これらの逸脱行動を抑制する際には、当該の行動をとることが、周囲の人々に与える否定的な影響に着目させるなどして、逸脱行動を行わない場合に学生が感じる満足度を向上させることが重要となると考えられる。また、「中立」の行動基準を持つ者は、逸脱行動の頻度が高いだけでなく、友人の数も比較的多い傾向が示された。つまり、逸脱行動を頻繁に行っていても、少なくとも対人関係に関しては、望ましくない状況にあるとは限らない可能性が示唆されている。今後は、このような「中立」の行動基準を持つ者の特徴についても、さらなる検討を行っていく必要がある。

—引用文献—

- Axelrod, R. (1980a). Effective choice in the prisoner's dilemma. *Journal of Conflict Resolution*, **24**, 3-25.
- Axelrod, R. (1980b). More effective choice in the prisoner's dilemma. *Journal of Conflict Resolution*, **24**, 379-403.
- Axelrod, R. (1984). *The Evolution of Cooperation*. NY: Basic Books. (アクセルロッド, R. 松田裕之 (訳) (1998). つきあい方の科学: バクテリアから国際関係まで ミネルヴァ書房)
- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 1015-1026.
- 出口拓彦 (2007). 私語に対する個人の態度が教室全体に及ぼす影響: なぜ「してはいけない」と考えられている私語が広がるのか 日本グループ・ダイナミクス学会第54回大会発表論文集, 14-17.
- 出口拓彦 (2012). 教室における規範逸脱行動に対する縦断的検討 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 680.
- 出口拓彦 (2013). 規範逸脱傾向のある生徒は学級内の逸脱行動を増加させるのか 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 58.
- Deguchi, T. (2013). Classroom rule-breaking behaviors and adjustment to campus life. Poster session presented at the 13th European Congress of Psychology (FR-P172), Sweden.
- Deguchi, T. (in press). A simulation of rule-breaking behavior in public places. *Social Science Computer Review*. 11/24, 2013. doi:10.1177/0894439313511186
- 出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連—大学生生活への適応という観点からの検討— *社会心理学研究*, **21**, 160-169.
- Durmuscelebi, M. (2010). Investigating students misbehavior in classroom management in state and private primary schools with a comparative approach. *Education*, **130**, 377-383.
- 石原英樹・金井雅之 (2002). シリーズ意思決定の科学 5 進化的意思決定 朝倉書店
- Kelly, H. H., Holmes, J. H., Kerr, N. L., Reis, H. T., Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A. M. (2003). *An atlas of Interpersonal Situations*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 北折光隆 (2006). 授業中の私語に関する研究: 悪質性評価の観点から 金城学院大学論集 (人文科学編), **3**, 1-8.
- 北折光隆・太田伸幸 (2011). 講義中の私語抑制対策に関する効果測定: 座席指定とTAによる見回り実施に対するFD評価項目の比較検討 東海心理学研究, **5**, 8-14.
- 北折光隆・吉田俊和 (2000). 違反抑止メッセージが社会規範からの逸脱行動に及ぼす影響: 大学構内の駐輪違反に関するフィールド実験 実験社会心理学研究, **40**, 28-37.
- 小牧一裕・岩淵千明 (1997). 授業規範: 反規範行為における意識構造 日本心理学会第61回大会発表論文集, 381.
- 近藤信子・宇野保子・中川早苗 (2006). 身体装飾について: 第2報 独自性欲求との関連 中国学園紀要 **5**, 9-14.
- 黒川正流 (1990). 大学生の恋人関係と友人関係の相互依存構造 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 46-47.
- Latane, B., Nowak, A., & Liu, J.H. (1994). Measuring emergent social phenomena: dynamism, polarization, and clustering as order parameters of social systems. *Behavioral Science*, **39**, 1-24.
- 水野邦夫 (1998). 授業規範の構造及びその違反に対する許容度について 聖泉論叢, **6**, 89-102.
- 水野邦夫 (2001). 親の養育態度が大学生の授業規範意識に及ぼす影響について 聖泉論叢, **9**, 21-31.
- Nowak, A., Szamrej, J., & Latane, B. (1990). From private attitude to public opinion: a dynamic theory of social impact. *Psychological Review*, **97**, 362-376.
- Osman, L., M. (1982). Conformity or compliance? A study of sex differences in pedestrian behavior. *British Journal of Social Psychology*, **21**, 19-21.
- Rapoport, A., & Guyer, M. (1966). A taxonomy of 2

- x 2 games. *General systems: Yearbook of the society for the advancement of general systems theory*, **11**, 203-214.
- Reno, R. R., Cialdini, R. B., & Kallgren, C. A. (1993). The transsituational influence of social norms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 104-112.
- 齋藤和志 (1999). 第7章 対人的相互作用 吉田俊和・松原敏浩(編著) 社会心理学：個人と集団の理解 ナカニシヤ出版 pp. 123-140.
- Scodel, A., Minas, S., Ratoosh, P., & Lipetz, M. (1959). Some descriptive aspects of two-person non-zero-sum games. *Journal of Conflict Resolution*, **3**, 114-119.
- 島田博司 (2002). 私語への教育指導：大学授業の生態誌2 玉川大学出版部
- 杉村 健・小川嗣夫 (2003). 大学生の授業に対する規範意識の検討 人間文化研究, **12**, 85-96.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H., H. (1959). *The Social Psychology of Groups*. New York: Wiley.
- 卜部敬康・佐々木薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究：リターン・ポテンシャル・モデルの適用 教育心理学研究, **47**, 283-292.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究(1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **46**, 53-73.

— 謝 辞 —

調査にご協力いただきました先生方、学生の皆様に心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部は、科学研究費補助金(若手研究B, 課題番号22730508)の援助を受けました。